

小学校 生活・総合的な学習の時間 部会

部会長名 真木小学校 校長 中川 真一
実践者名 真木小学校 教諭 宮村 歩

- 1 研究主題 「共生社会を目指す、心豊かな子どもを育てる総合的な学習」
～交流活動を大切にした障害者理解の実践を通して～

2 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

障害者基本計画において、「21世紀に我が国が目指すべき社会は、障害の有無にかかわらず、国民誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会とする必要がある。」という方向性が示された。また、教育に関して「障害のある児童及び生徒と障害のない児童及び生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによって、その相互理解を促進しなければならない。」ということが明記された。

近年、特別支援学校や特別支援学級に在籍している幼児・児童・生徒が増加する傾向にあると言われ、インクルーシブな教育制度の確保が必要とされている。このような動向を踏まえ、障がい者との交流を通して、障がいのある人とない人が支え合い、共に生きることができる「共生社会」を目指す、心豊かな子どもを育てることは大変意義深い。

(2) 本校の実態から

今年度4月、本校すぐ横に、児童発達支援事業所である「キッズケアひこほたる」が移設された。発達障がい等がある園児の通所施設であり、本校に入学予定の児童も在籍している。

本校では、これまで人権学習や町内にある障がい者施設との交流から、様々な体験を通して、障がい者理解のための学習に取り組んできている。しかし、昨年度、障がい者に対する差別的言動もあり、障がいについての正しい理解や障がいのある人の気持ちを考える学習などが十分とは言えない。

本学級の児童は、5年生の時からボランティア活動として地域の老人福祉施設や保育園で交流活動をおこなってきており、様々な人と積極的に関わろうとする姿が見られる。「ひこほたる」の園児達に対してもやさしく声をかけたり、遊びに誘ったりすることができる。しかし、学級内においては、自分の思いやペースに合わないことがあると、荒っぽい言葉で怒鳴ったり、嫌なあだ名で呼んだりする等、人間関係のトラブルも多い。

そこで、「ひこほたる」に通う園児達や先生方との交流を通して、障がいについての理解を深めるとともに、個性を認めあうことの大切さや共生社会における自分自身の在り方を考えさせたいと思い本主題を設定した。

3 主題の意味

(1) 「共生社会を目指す」とは

「共生社会」とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障がい者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会のことである。それは、

誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会といえる。

人はそれぞれ違う立場や人格、個性を持っている。そのような人間同士が、互いを認め合えるようになるためには、お互いの個性や特徴などを正しく知り理解することが必要である。また、正しく知るためには、直接的な関わりを持ち、心と心を通わせる体験が重要となる。

つまり、本研究における「共生社会を目指す」とは、障がいのある者と障がいのない者が共に学ぶ活動を通して、お互いを認め合い支え合う社会にしようという実践力を身につけることである。

(2) 「心豊かな子どもを育てる」とは

近年、子どもの心の成長にかかわる現状については、子どもを取り巻く環境の変化、家庭や地域社会の教育力の低下、体験の減少等の中、生命尊重の心の不十分さ、自尊感情の乏しさ、人間関係を形成する力の低下など、様々な問題点が指摘されている。そこで、学習指導要領改訂の基本的な考え方の一つとして、豊かな心や健やかな身体の育成のための指導の充実が挙げられ、体験活動の重要性が提言されている。

「心豊かな子ども」とは、美しいものに感動し、生きることの喜びと感謝の気持ちを持ち、明るく、前向きに、たくましく生きようとする子どもと考える。「心豊かな子ども」は、自分を大事にすると同時に他人を思いやる子どもでもある。社会を構成している様々な人の個性を認めたり、自分にできる支援を考えたり、他人の立場や心を十分に尊重できるような判断力と行動力に支えられた子どものことである。このような子どもの姿は、人と人との交流における温かい人間関係を基盤として、子ども自らが主体的に人や環境に働きかけ、直接的で具体的な体験を通して育まれていくものであると考える。

つまり、本研究における「心豊かな子どもを育てる」とは、体験活動や交流活動を通して、障がいがあるなしに関わらず、自分や他人を大切にできる子どもを育てることだと考える。

4 研究の目標

総合的な学習の時間において、交流活動を大切にしたい障がい者理解の実践を通して、共生社会を目指す、心豊かな子どもの育成を図る指導の在り方を究明していく。

5 研究の仮説

総合的な学習において、以下のような手立てをとれば、子どもは、障がいに関心を持ち、身近な課題としてとらえて、主体的に関わり方や支援の方法などについて考え、共生社会を目指した心豊かな子どもに育つであろう。

ア 年間を通じた計画的な体験・共同活動の実施

イ 障がい者や障がいを支える先生方との交流の場の設定

ウ 「体験する」「ふりかえる」「実践する」「発信する」という活動構成の工夫

6 研究の計画

(1) 単元名 「障がいについて学ぼう～ひこほたるとの交流を通して～」

(2) 単元の目標

- 障がいのある人に対して抱いていた自分自身のイメージを認識し課題を持つ。
- 交流を通して、障がいについて理解し、障がいのある人の思いや願いを考える。
- [ひこほたる]で学んだことから、障がいや個性について考え、自分の生活にかかしていかうとする実践的態度を養う。

(3) 単元の評価基準

評価の観点	問題を解決する 資質や能力	学び方やものの 考え方	主体的・創造的・協 同的に取り組む態度	自己の在り方・ 生き方
評価基準	<ul style="list-style-type: none"> ・障がいに対する自分のとらえ方に問題意識を持つことができる。 ・課題をいかして次の活動に向けた計画を立てることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を解決するための方法や道筋を考えることができる。 ・自分たちが考えたことを分かりやすく発信する方法を追求している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手意識をもつて、積極的に交流しようとしている。 ・先生や友達の考えを聞き、意見交流しながら自分の考えを深めている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・交流を通して考えたことを日常と重ね、自分の言動につなげようとしている。 ・障がい者の生き方・考え方に触れ、自己の在り方を見つめる。

(4) 指導計画 (総時数：25時間 時期：5月～2月)

時	主な学習活動	評価基準及び評価方法
1	・「障がい」について考える。	◎障がいについて考えたことを積極的に発表したり、友達の考えを知ろうとしていたりしている。 〈主体的態度〉(観察・学習シート)
2	・先生方からひこほたるの施設のことや障がいのとらえ方などの話を聞く。	◎障がいに対する自分の考えと先生方の考えの違いを見つめ、課題をつかみ、めあてをもつことができる。 〈問題解決能力〉(観察・学習シート)
3	・ひこほたるのダンス教室に参加し、園児と出会う。	◎園児達と積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。 〈主体的態度〉(観察)
4	・ダンス交流をふりかえり、次の活動の計画を立てる。	◎園児との関わり方の課題から、次の学習のめあてをもつことができる。 〈問題解決〉(観察・ふり返りシート)
5	・さつまいもの苗植えをする。	◎園児達と協力して楽しく苗植えをすることができる。 〈主体的態度〉(観察)
6	・苗植えの交流をふりかえり、次の活動の計画を立てる。	◎園児との関わり方の課題から、次の学習のめあてをもつことができる。 〈問題解決〉(観察・ふり返りシート)

7	・ひこほたるの壁面に飾るあじさいを製作する。	◎めあてを意識した関わり方を工夫して、園児達と交流することができる。 〈問題解決〉(観察)
8	・製作の交流をふりかえり、次の活動の計画を立てる。	◎最初の関わりと今の関わりを比較して変容や成長に気づくことができる。 〈自己の在り方〉(観察・ふり返しシート)
9	・1学期の交流のまとめをする。 ①友達との意見交流をする。	◎友達の考えを尊重しながら意見交流し自分の考えを深めている。 〈協同的態度〉(観察・学習シート)
10	②先生方と意見交流会をする。	◎今後、園児達とよりよい交流ができるように、積極的に質問をしたり意見を述べたりすることができる。 〈主体的態度〉(観察・学習シート)
11	③新聞にまとめる。	◎これまでの学習シートを整理し、分かりやすくまとめようとしている。 〈学び方〉(観察・新聞)
12	・さつまいもパーティー準備をする。 ①準備の計画をたてる。	◎一学期のふりかえりから、調理にあたって配慮すべき事項を考え、今後の活動の計画を立てている。 〈学び方〉(観察・学習シート)
13	②園児の個性を知る為の取材をする	◎目的意識をもって、主体的に先生方に取材しようとしている。 〈主体的態度〉(観察・学習シート)
14	(「友達ノート」にまとめる)	
15	③友達ノートをもとに準備をする。	◎取材したことをいかし、相手意識をもって準備をしている。 〈問題解決能力〉(観察・学習シート)
16	(メニュー、手順の説明、支援の仕方、危険のない環境づくり等)	
17	・さつまいもパーティーをする。 【本時】	◎個性や特徴に応じた関わり方を工夫して、一緒に楽しく交流することができる。 〈問題解決能力・主体的態度〉(観察)
18	・さつまいもパーティーでの交流をふりかえり、活動のまとめをする。	◎自分たちの関わり方次第で、障がいがあることがハンデとならず、楽しく活動できるということに気づく。 〈問題解決〉(観察・ふり返しシート)
19	・人権集会で発信する計画を立てる。 (内容、方法、ひこほたるの招待等)	◎自分たちが一番伝えたいことを明確にし、効果的に発信する方法を考えている。 〈学び方〉(観察・学習シート)
20	・発信原稿をつくる。	◎交流を通して捉えなおした「障がい」に対する自分の思いを表現している。 〈自己の在り方〉(観察・発信原稿)
21	・人権集会で発信する。	◎全校のみんなに分かりやすく伝えるように工夫しながら発表している。 〈問題解決能力〉(発表)

22	・ふりかえりをする。	◎発表したことと日常の自分の姿をつなげて、今後のめあてを持つ。 〈自己の在り方〉(観察・学習シート)
23 24	・「感謝の会」の計画を立てる。	◎一年間楽しく交流できたことへの感謝の気持ちを持って、積極的に意見を出し、話し合いに参加している。 〈主体的態度〉(観察・学習シート)
25	・感謝の会を開催する。	◎自己の成長や変容を自覚し、これからの在り方、生き方について伝えることができる。 〈自己の生き方〉(観察・発表・手紙)

7 指導の実際

(1) ねらい

- ・ひこほたるとの「さつまいもパーティー」を通して、個性や特徴に応じた関わりを工夫しながら、主体的に活動することができる。

(2) 学習の展開

	学 習 活 動	指導上の留意点 (※評価)
導 入	1 これまでの活動をふりかえり、本時の学習を確認する。	・自分たちの育ててきたさつまいもを調理するという意識づけるために、苗植え→収穫→本時の調理という活動の流れを写真で可視化する。
	2 さつまいもパーティーをする。 ・はじめの言葉 (めあて)	・はじめの言葉の中で、どんな交流にしたいかというめあてを発表させ、掲示する。
展 開	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>ひこほたるのみんなと協力しておいしいスイートポテトを作り、一緒に絆を深めよう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・作り方の説明 ・調理開始 ・会食 ・メダル渡し 	<ul style="list-style-type: none"> ・工程ごとに写真を掲示したり、実際にやってみせたりする等、わかりやすい説明の仕方を準備させておく。 ・グループ毎に教師がついて、安全面に十分配慮する。 ・全員が時間内にできあがるように、園児の発達段階に応じたグループ分けをおこない作業内容(道具・工程)を考慮して、事前準備をしておく。 <p>※事前の準備をいかして、園児の特徴や個性に応じた関わりを工夫することができたか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食べることができない園児に無理に食べさせることはせず、必要な場合は、食事の支援をおこなう。 ・「～が上手にできたね」「最後までよく作

	(・ふれあいタイム) ・おわりの言葉	ったね」などががんばったことを褒めながらメダルを渡すようにさせる。
終 末	3 本時の学習をふりかえる。	<ul style="list-style-type: none"> ・時間が余ったら、園児たちが好きな「妖怪体操」を一緒に踊れるように準備しておく。 ・感想の交流によって、本時をふり返らせる。園児が難しい場合は先生方をお願いする。 ・子どもたちの感想に対し、できたことについては、事前の取り組みとつなげて価値づけ、できなかったことについては、今後の活動につなげていけるように方向づける。

(3) 授業の考察

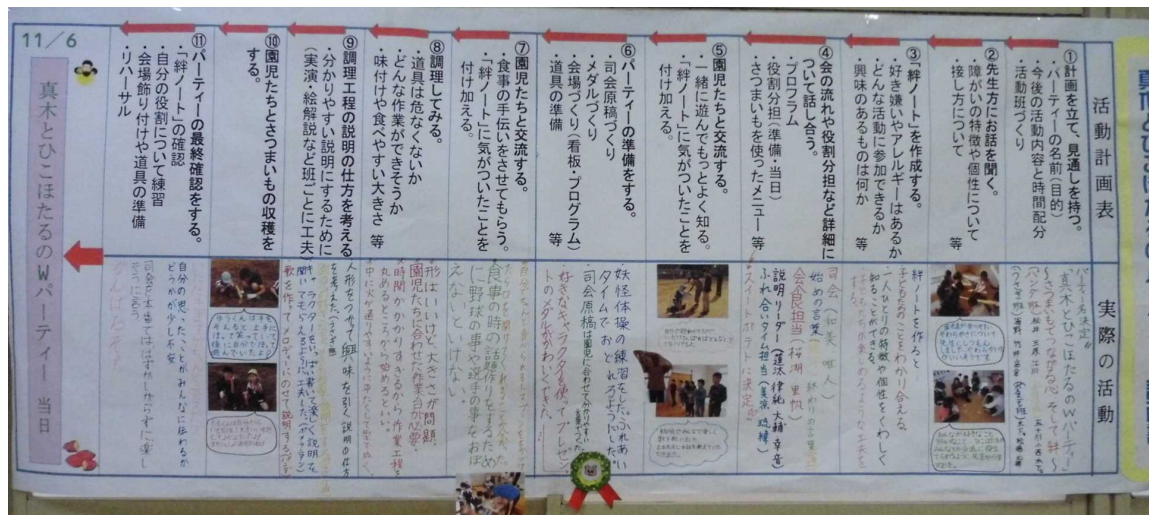
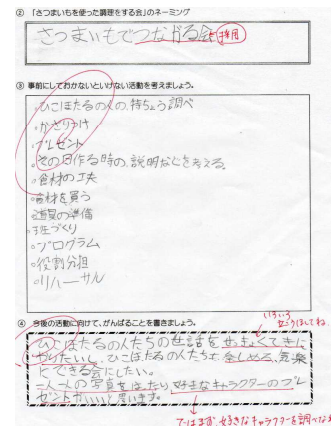
本時授業にあたって、ねらいを達成するために事前に「ア、子ども達の自治的・自発的な活動計画の作成」と「イ、絆ノートの活用」を手立てとし、準備をおこなった。

「ア、子ども達の自治的・自発的な活動計画の作成」

子ども達が主体的につくる会にするために、まずこの収穫祭の名前を話し合った。『真木とひこほたるのWパーティー～さつまいもでつながる心と絆～』に決まり、何のために収穫祭をするのかという目的も明確になったため、「協力して作る」「一緒に絆を深める」といったキーワードが出され、めあてにつながった。

次に、収穫祭を成功させるために、事前にどんな活動が必要か計画を立てた。材料や道具を準備する、会場を作る、作り方の説明を考える等、これまでの経験から活動を挙げていっ【資料1 ワークシート】た。しかし、具体的に必要な道具や説明の仕方等を話し合う中で、どんな道具なら使うことができるのか、説明をどのくらい理解できるのかなど知らないことがたくさんあることに気づいた。そこで、この会に参加してくれる子ども達の特徴や個性、接し方などを先生に聞いてみることから始めようということになった。

そして、活動の見通しがもてるように、みんなで収穫祭までの活動計画表をつくり、活動後には交代でふりかえりを書くことにした。



【写真1 活動計画表】

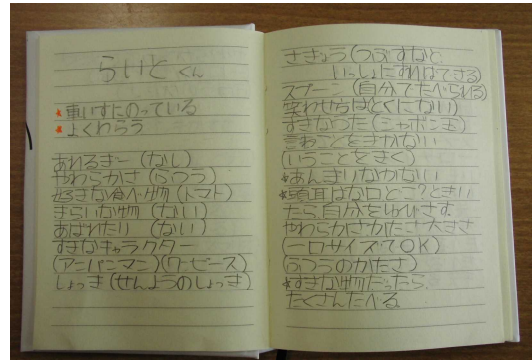
「イ、絆ノートの活用」

一学期からの交流の中で、ひこほたるの子ども達の名前や、好きなキャラクターや遊び性格などが少しずつ分かってきた。そこで、お互いが知っていることを出し合って、一人一人の特徴や個性を記録したノートを作ろうということになった。「水遊びが好き」「怒ると高いところに登る」「3回呼んだら来てくれる」など子ども達が園児一人一人をよく見ていることに驚いた。そこで、六年生とひこほたるの園児をつなぐ絆となるノートという意味から「絆ノート」と名付け、個々で作成に取りかかった。

活動計画では、先生方に話を聞くことから始めようということになったので、収穫祭にむけた調理の実態や好き嫌いなどを聞いて、絆ノートにメモをし、今後の活動にいかすことにした。イモの丸め方や食べやすい大きさ、作業台の高さや車いすが通るスペースなど、絆ノートに書かれているメモを見ながら細かいところまで配慮することができた。相手のことをよく知るといふことの大切さが実感できたようだった。

本時ではまず導入で、写真を使ってサツマイモの苗植えや収穫をした活動をふりかえった。ひこほたるの子どもたちは、自分や友達の写真を見て「〇〇ちゃんだ」とうれしそうに声をあげ、一緒にスイートポテトを作ることを楽しみにしてくれている様子が、うかがえた。

次に、6年生みんなで考えためあてを確認し、スイートポテトの作り方の説明に入った。「絆ノート」をもとに、一人一人の障がいの特徴や個性に合わせて、道具や行程、説明の仕方などを班ごとに工夫し準備した。



【写真2 絆ノート】



【写真3 説明の道具】



【写真4 説明の練習】



【写真5 説明の様子】

ちわわ班と一緒に活動する子ども達は、常に動き回ったり高いところに登ったり活動的な子どもたちだったので、興味、関心をひくよう、その子の好きなキャラクターのお面をかぶって、作業工程の説明をおこなった。それでも自由に動き回るため、動きに合わせて移動しながら説明していた。

パンダ班と一緒に活動する子ども達は、作り方が分かれば、自分たちで調理をすることができる子ども達だったので、作り方をしっかり覚えてもらうために、作業工程ごとにメロディーをつけて、身振り手振りを加えてリズムカルに説明をおこなった。ひこほたるの子ども達も一緒に歌いながら最後まで楽しく説明を聞くことができた。

ポメラニアン班と一緒に活動する子ども達は、話をよく聞き、調理をすることも食べることも好きな子ども達だったので、自分たちが実際に作って見た時の写真を使いながら、作業工程や作り方のコツなどを説明していった。「おいしそう」「早く作りたい」と目を輝かせながら説明を聞かされた。



【写真6 説明の様子④】

うさぎ班と一緒に活動する子ども達は、車いすに乗った重度の障がいをもつ子ども達だったので、ペープサートを使って、子ども達に一つずつ確かめるように語りかけたり、手を取って、実際に丸める手つきをさせたりしながら説明した。反応が返ってこないで、自分たちのやり方が不安になったようだが、「実際にやってみたらいいかも」と気持ちを切りかえ調理に入った。

調理では、班ごとに一緒に活動する子ども達に合わせて道具や作業内容、役割分担を工夫した。途中で他のことに興味が移ってしまう子、一つの作業に固執してそれだけをやり続ける子など、計画通りにいかず戸惑う姿も見られた。しかし、事前に色々な事を想定して、接し方、声のかけ方支援の仕方などを先生方に聞いていたため、臨機応変に対応し、どの班もみんなで協力してスイートポテトを作ることができた。



【写真7 調理の様子】

会食では、事前の調査でサツマイモが嫌いな子やみんなのいる場では食べないであろうと予想される子がいたので、無理に食べさせることはせずに、みんなで作った物をみんなで囲むという楽しい会食の雰囲気味わうだけでもいいと話していた。しかし、「もっとちょうだい」といっていつもよりたくさんおかわりした子、偏食で、今まで一度もサツマイモを口に入れたことがなかったのに初めて食べた子等、みんながおいしいと言って食べてくれたので、招待した六年生も達成感を持てたようだった。

会食後にプレゼントとして、一人一人の好きなキャラクターを描いたメダルを渡した。今日がんばったことをほめてから首にかけてあげようと話していたので、「イモを丸めるのが上手だったね。」「たくさん食べてすごかったね。」などそれぞれ声をかけながら渡すことができた。もらったひこぼたるの子ども達はうれしそうに受け取り、得意そうに先生に見せる等してはしゃいでいた。

その後、ふれ合いタイムとして、ひこぼたるのみんなが大好きだという「妖怪体操第一」を一緒に踊った。運動会にもダンスの時間にも絶対に踊らなかった女の子が、司会者のマイクを手に取り、勢いよく踊り出したので、先生方が驚いていた。「できないのかなと考えていた事が環境や人との関わりによってできるということが分かってよかったです」と話してくださった。



【写真8 会食の様子】



【写真9 プレゼント渡し】



【写真10 ふれ合いタイム】

計画通りにいかない部分はあったが、子ども達は、園児一人一人の個性や特徴に応じた関わりを工夫しながら、主体的に活動をすることができた。

8 研究のまとめ

本研究の目標は、障がいに関心を持ち、身近な課題としてとらえて、主体的な関わり方や支援の方法などについて考え、共生社会を目指した心豊かな子どもの育成を図ることであった。そのために、

ア 年間を通した計画的な体験・共同活動の実施

イ 障がい者や障がいを支える先生方との交流の場の設定

ウ 「体験する」「ふりかえる」「実践する」「発信する」という活動構成の工夫の三点を具体的な手立てとして取り組んできた。

ア 年間を通した計画的な体験・共同活動の実施について

学校と施設がつながり、子どもの実態や行事など細かいことを打ち合わせながら、年間を通した共同的な体験活動を設定することができた。子ども達の自主性・自発性を大切にして取り組むことで、探求意欲や課題追求意欲の継続化が図れた。実際に、ダンスをする、製作をする、調理をするといった様々な体験活動を協同的に行うことを通して、障がいとはどんなものを五感で捉え、自分たちにどんな支援ができるのかを学ぶことができたと思う。さらに、障がいは、不便でたっても不幸ではなく、自分たちが障がい者にとって居心地のいい環境を作ることができれば、障がいは障害ではなくなるということを知ることができた。

イ 障がい者や障がいを支える先生方との交流の場の設定について

最初、子ども達は障がいを「ふつうでることができないこと」「治らない病気」などマイナスイメージで捉え、障がい者を「こわい」「かわいそう」と思っていた。実際に、一回目の交流では、遠巻きに様子を見てなかなか声をかけることができなかった。しかし、先生方に話を聞いて、障がいは特徴であり、自分たちにも得意なことや苦手な事があるように障がいのある人にもできることやできないことがある、それが個性であるということが分かり、肩の力を抜いて接することができるようになった。

人と人とのふれ合いの中で、「名前を覚えてくれた」「サッカーが上手」などよさを見つけ、「かわいい」「早く会いたい」と意識が変容していった。また、実際の関わりの中から車いすの押し方や食事の介助など一人一人に応じた支援の仕方を身につけることができた。

ウ 「体験する」「ふりかえる」「実践する」「発信する」という活動構成の工夫

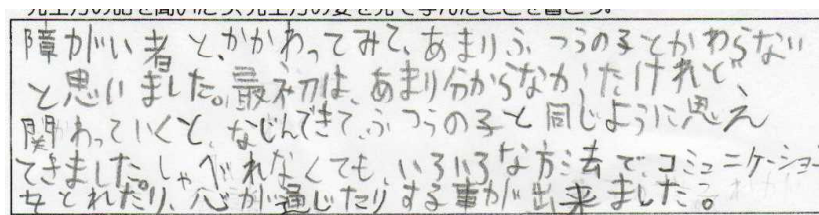
体験活動を通して、日常の行動化につなげることが大切であると考え、四段階の活動構成を工夫した。体験活動の後に必ずその活動をふり返る時間を設定した。体験から学んだことや新たに出てきた課題を整理し、みんなで話し合い、次の活動のめあてを立てていった。活動をふりかえることは、自分の姿や考え方などをふりかえることにもつながるので、自分の成長や変容などを認識することができてよかった。

また、自分たちが学んだことや考えたことを発信しようと、少年の主張大会で作文を読んだり、人権集会で障がい者差別のおかしさを劇にして訴えたりする中で、さらに障がい者への理解を深めることができた。

9 成果と今後の課題

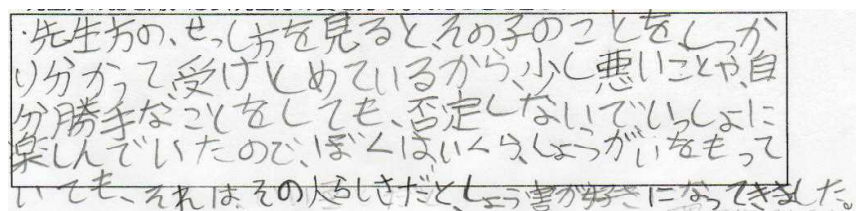
(1) 研究の成果

- ひこぼたるとの年間を通じた交流活動によって、障がい者を身近な課題としてとらえ、障がいに対する見方、考え方が変容した。



【 資料2 子どもの感想 ① 】

- 共同的な体験活動や先生方の姿から、障がい者への関わり方や道具の使い方など具体的な支援の仕方を知ることができた。



【 資料3 子どもの感想 ② 】

- さりげなく困っている人を手伝う姿や友達の苦手なところを特徴と捉えて受け入れる姿などが日常の中でも見られるようになった。

(2) 今後の課題

- 仕組まれた活動だけでなく、地域にある施設、地域に住む友達として相互理解を深め、自発的な交流ができるような子どもの姿を目指していく。
- 横断的に内容を取り扱ったり、各教科の内容と関連づけたりしながら、計画的・継続的に取り組みを行っていく必要がある。
- 子ども達の発達段階に応じて、系統的に交流が出来るよう学校全体の総合的な学習の時間の見直し、改善、編成をおこなう。

◎ 参考文献

- ・ 小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 文部科学省
- ・ 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開(小学校編) 文部科学省
- ・ 「教育新時代」を拓く初等中等教育改革 文部科学省
- ・ 文部科学省実績評価書 「豊かな心の育成」 文部科学省